2023年5月7日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書18章15～17節
説教：子どものように

１　人々の願い
１）幼子たちまで連れてきた
　だれでも母親から赤ちゃんで産まれ、親や大人たちの世話を受けながら育ちます。やがて大きくなり今度は一人の子どもの親になってみると、あのとき親が自分に対して多くの愛情を注いでくれていたことに気がつきます。親が子どもを思う気持ちはどんな時代も変わりません。
　15節に「さて、イエスに触れていただこうと、人々は幼子たちまで連れて来た」とあります。これはなにか。相撲が大好きな方はご存じかも知れませんが、相撲力士に赤ちゃんを抱っこしてもらうと健康に育つ、そんな言い伝えがあると聞きます。地方巡業などで力士が町に来るときなど、赤ちゃんを抱っこしてもらうために親が行列をつくって並ぶほどだそうです。親が幼子をイエスのところへ連れて来たのは、実はこれと同じ発想。イエスに触れてもらえば、きっとこの子どもは元気に成長する。そんな願いを持って親たちが幼子をどんどん連れて来ようとした。

２）叱る弟子たち
　ところがこれを見ていた弟子たちは親たちを叱って、イエスのほうへ行かないように止めようとする。理由はおわかりですね。自分たちの先生であるイエスは大人の話をしている。子どもがいると泣いてうるさいし、いたずらしたりして騒がしい。これでは大事な話しが聞こえない。迷惑になるからあっちへ行けと、いうことです。
　ところがこれをご覧になっていたイエスはこのように言います。16節。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。邪魔してはいけません。神の国はこのような者たちのものなのです。」
　先生のためによかれと思ってやったことだったのに、かえって弟子たちのほうがイエスに叱られてしまいます。

２　イエス
１）呼び寄せる
　そのときのイエスの行動に着目します。16節の前半です。「しかし、イエスは幼子たちを呼び寄せて、こう言われた。」
　幼子たちを呼び寄せたのはだれでしょうか。この場面、弟子たちは幼子たちのすぐそばに居ますから、普通なら弟子たちに命じて子どもたちを連れて来させるはず。ところがよく読むとそうではなくて、イエスが直接幼子たちに「わたしのところへ来なさい」と言って呼び寄せている。その後から、こんどは弟子たちに『子どもたちを、わたしのところへ来させなさい」と注意する。そういう順番になっています。イエスが直接幼子たちを呼び寄せていることに注意してください。

２）神の国
　続く16節後半がその弟子たちへの注意の内容。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。邪魔してはいけません。神の国はこのような者たちのものなのです。」
　ここで神の国が出てきます。パリサイ人たちもこの神の国のことについては深い関心を寄せていたらしく、あるときイエスにこう尋ねたことがありました。「神の国はいつ来るのか。」そうするとイエスはこう答えます。「神の国は、目に見える形で来るものではありません。」「見なさい。神の国はあなたがたのただ中にあるのです。」「あなたがたのただ中にある」ということですから、かなり近いところにある。それはうれしいことですが、困ったことに神の国は見えないし、触れられませんからよくわからないところがたくさんある。それでも、私たちは、できるなら神の国に迎えられたいと願っています。どうしたら神の国に入ることができるのかとだれもが知りたいと思っています。そんな疑問に対し、イエスは一つのヒントを語っています。

３）「子どものように」とは？
　「神の国はこのような者たちのものである。」このような者たちとは、子どものこと。その子どものことは17節にも続きます。「まことに、あなたがたに言います。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできません。」
　どうも神の国に入るためには、子どもにならなければならないようです。でも一度大人になった者が、子どもに戻ることはできません。ですからこれはなにかの比喩として言っていることになる。では、「子どものようになる」とはいったいどういうことか。そこがポイントらしいことはわかって

きましたが、さてでは具体的にはどうすればよいのか。

ある方はこう言います。「親が子どもにいろいろなことを教えていくとき、子どもはなにも疑わないで、そのまま素直に受け取ります。それと同じように、私たちも子どものようにイエスを疑わずに素直に信じましょう。」それが「子どものように」という意味。間違いではないと思いますが、もう少し深く掘り下げることができそうです。

３　神の国を受け入れる者

１）パリサイ人の祈り

そこで、目を留めたいのは、この箇所の前後にどんな話しがあったのかです。福音書はいっけんするとひとつひとつがばらばらに並べられているように見えますが、実はちゃんと前後のつながりがある。けっしてばらばらではありません。そうすると今日の箇所の理解するためには、前と後ろに何が書かれていたかを見れば何かわかるのではないか、というわけです。

そこでまず前のほうを見ていくと、9節からパリサイ人の祈りと取税人の祈りが始まっていました。パリサイ人は自分を正しいと確信し、自信をもって神の前に立ち、「私は罪を犯したことがなく、週に二度断食し、十分の一も献げています」と祈り、それでも足りないと思ったのか、「自分はこの取税人のようでないことを感謝します」と付け加えました。

２）取税人の祈り

いっぽう取税人はそれとは反対に、神の前から遠く離れて立ち、胸をたたきながらこう祈る。「神さま、罪人の私をあわれんでください。」

パリサイ人と取税人。この二人のうちどちらが正しい人間ですかと聞かれたら、普通の人はパリサイ人の方が正しいと答えるでしょう。ところがイエスはこう言う。「あなたがたに言いますが、義と認められて家に帰ったのは、あのパリサイ人ではなく、この人です。だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです。」

これが今日の箇所のすぐ前にあった話しの内容でした。

３）ある指導者の悲しみ

では、今日の箇所のすぐ後にはどんな話しがあるか。これは先週見ました。社会的に高い地位にあったある指導者がイエスの所に来て、「何をしたら永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょう」と質問します。二人の間にいくつかやりとりがあって後で、イエスはこう言います。「あなたが持っている全財産を売り払って、それを貧しい人たちに分け与えなさい。」ところがこの指導者は、イエスのことばを聞いて「とても自分にはできない」と思って、非常に悲しみながら帰って行った。そういう話しでした。

４）自分を低くする者は

いま前と後にどんな話しがあったのか確認しました。「子どものように神の国を受け入れる者」とはどんな人のことか。ここにヒントがあります。パリサイ人と取税人。この二人の違いは何であったのか。パリサイ人は自分を正しいと確信していました。イエスに言わせれば、自分を高くしていた。いっぽう取税人は、自分は罪人であるとはっきりと自覚し、あまりにも汚れた者なのでとても神の所へは行けないと悲しんでいた。イエスに言わせれば、自分を低くしていた。その結果、取税人は神によって高くされる。

今日の話の後ろに出てくるある指導者についてはどうか。この人が義とされたのかどうか書かれていません。でも、この指導者は「自分にはできない」と正直に告白して悲しんでいます。それは自分を低くしたということではないですか。ということは、この指導者は神によって高くされる、救われて神の国に迎えられていった。

５）神の国に迎えられる

「子どものように」、そこだけ切り取って言われると、「子どものように素直に」、そんなふうな発想が出てきてここを理解しがちです。でも、取税人の祈り、悲しみながら帰って行ったある指導者、この二人をみるとよくわかる。「子どものように」とは、「子どものように小さくなっていくこと、低くなっていくこと。」

こんなことを言うと、すぐにこんな話が出てくる。「私たちは救われるために努力して子どものようにならなければなりません。」いいでしょうか。神の国は、努力して入れるようなところではありません。イエスが語ったことばを思いだしてください。「人にはできません。」努力ではない。じゃ、どうすることか。神の前で自分はできない者なのだと認めること。それはとても悲しくてつらいことです。でも実は、そのときあなたは子どものようになっている。神の国はあなたのものである。イエスはそう語ってくださいます。

皆さんは、自分が子どもだったときのことを覚えているでしょうか。たとえば箸かスプーンでを使ってご飯を食べる練習をするのですが、うまくいかずにご飯をこぼしてしまう。親はそんな自分を見て、ことばの意味はわからないけれどわーわー言っていて、どうも自分は失敗したらしいと感じる。そう思うとなんだか悲しかった記憶が残っています。でもあとから大きくなって気がつく。ごはんをこぼしてうまく食べられなかった子どもを、それでも愛情深く受けとめてくれて、辛抱強く私たちを育ててくれていた。神はそれ以上です。イエスはどうされたか。悲しんで子どものようになっている者に直接声をかけ、ご自分のところへ引き寄せ、「神の国はあなたのものだから、安心して行きなさい」と語ってくださいます。